

環境についての教育

国立環境研究所 青柳みどり

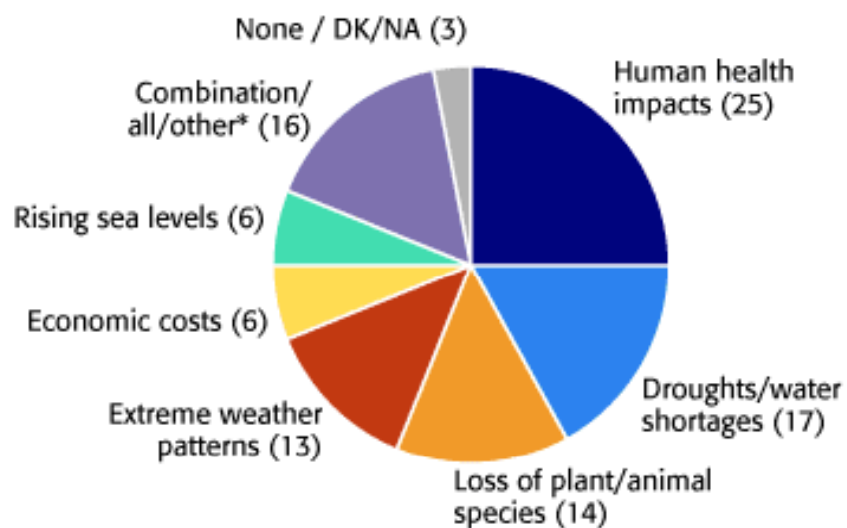
1. はじめに

- タイトルは「教育」となっていますが、それにとらわれずに、幅広く、「低炭素社会にどんな風に住むか」ということを考えてみたいと思います。それは、決して「我慢」の社会ではないし、江戸時代でもない、という前提です。もちろん、今、これから低炭素社会を考える私たちが、「なぜ低炭素社会を目指さなければならないのか」ということを理解した上でのことです。「教育」というのは、「教えて覚える」という意味ではなくて、「なぜ低炭素か」ということを理解するための手助けをするというくらいの意味合いです。

世界中の人が様々な不安を抱いている

Greatest Concern about Climate Change

Average of 20 Countries, General Public (n=10,298), 2007



Asked of half of sample in Australia, Brazil, Canada, Chile, China, France, Germany, Great Britain, India, Indonesia, Italy, Kenya, Mexico, Nigeria, Philippines, Russia, South Korea, Spain, Turkey, USA

*Unprompted

そもそも

- 「教育」とはいえ、「学校教育」だけでよいのでしょうか？
 - 2030年といえ、22年後（2050年で42年後）
 - 今、20歳の人が42歳（2050年で62歳）
 - いずれにせよ、「社会人」として活動している。
 - そう考えると、「学校後」の教育の方が重要ではないか？
 - 生涯教育、社会人教育etc.,

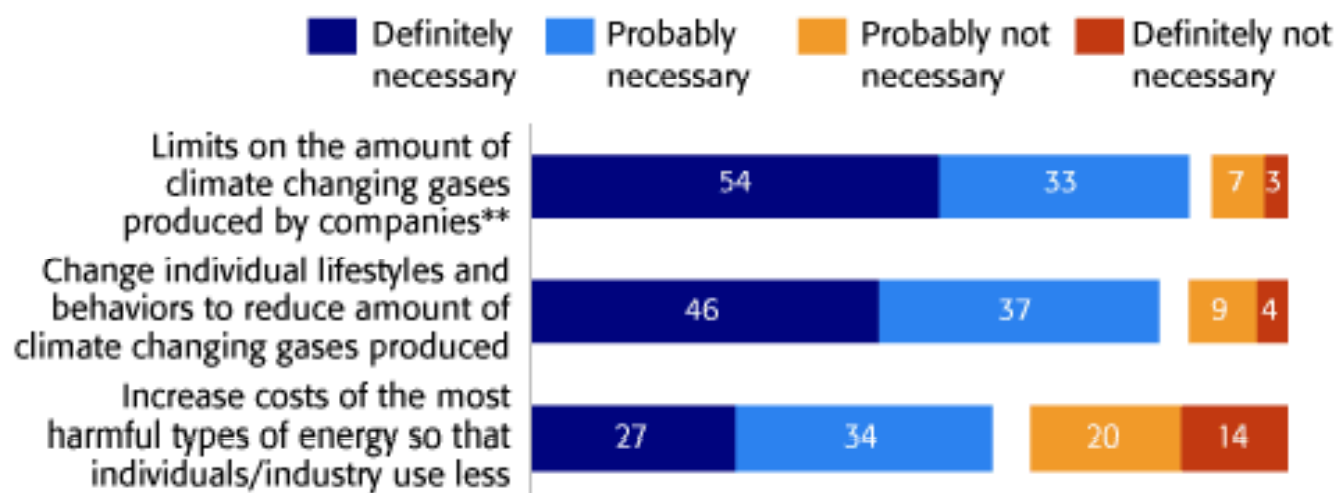
2. なぜ低炭素社会か。

- 「炭素」の割合を「低く」することを目指す社会というくらいの意味ですが、それは、エネルギーをはじめとする様々な資源を無駄に使わない社会という意味です。そして同時に「持続可能な社会」を目指すという意味合いも入っています。これは、決して「我慢」の社会を目指すというわけではありません。「我慢」ではなく「知恵」で、我々が皆がより幸福に生活出来る社会を作ろうという意味がこめられています。

ライフスタイルを変えることも重要 = 46% (世界22ヶ国で)

Action on Climate Change

Average of 21 Countries,* General Public (n=22,182), 2007



The white space in this chart represents "DK/NA."

*Australia, Brazil, Canada, Chile, China, Egypt, France, Germany, Great Britain, India (national sample), Indonesia, Italy, Kenya, Mexico, Nigeria, Philippines, Russia, South Korea, Spain, Turkey, USA

**Not asked in Egypt; urban sample in India

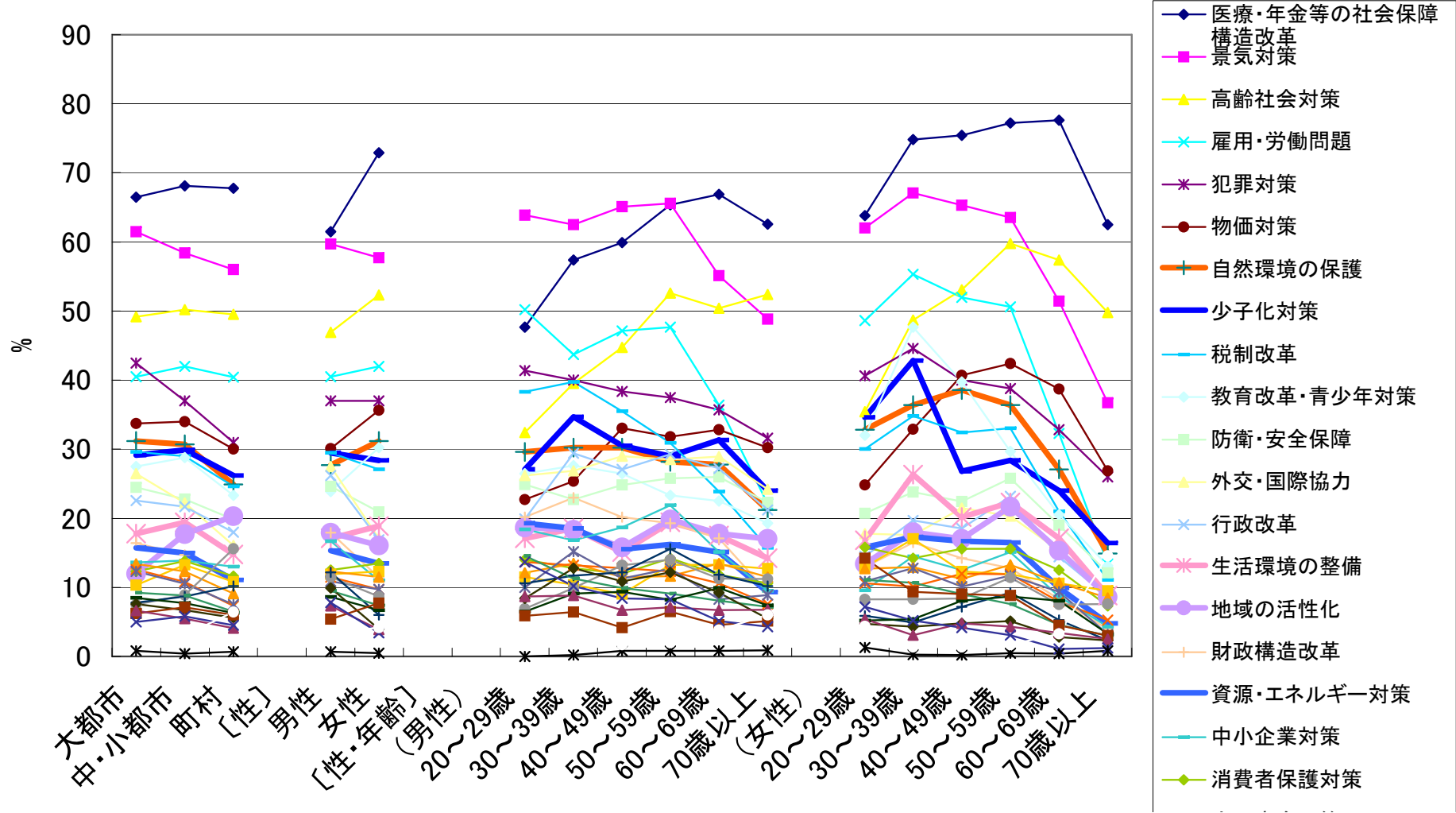
3. 自分たちの「シナリオ」を考える。

- 低炭素社会にするための方法は国や地域によって様々でしょう。共通しているやり方もあるし、異なっていることもある。これは、日本国内でもそうです。東京23区内とつくばでもそうでしょう。自分たちの地域にもっともあった方法を自分たちで考えなければなりません。

持続可能な社会とはどんな社会か？

- さらに、シナリオを考える際に考慮してほしいことがあります。「持続可能な社会とはどんな社会」なのかということです。
- 「持続可能性」とは、今多くの人考えるには、
 - 「環境、経済、社会」の3要素においてバランスのとれた社会

- 「社会」とは差別のないこともその意味の一つですが、上の図を見てください。住んでいる場所、性別、そして年代によって「政府に対する要望」が大きく異なっていることを示しています。例として、ひとつ「少子化対策」に着目してみましよう。女性の30歳代で40%を超える割合の人が挙げていることが分かります。他のグループでは30%程度です。これは、出産年齢にある女性が少子化対策を強く望んでいると示しています。当事者たちが強く望んでることを他のグループはくみ取れていたら、多くの人の幸福度が増すのではないのでしょうか。



総理府(内閣府)世論調査の結果「政府に対する要望」平成16年

アメーバ理論？

Global Action Planの事務局の人のお話から

高環境負荷型消費

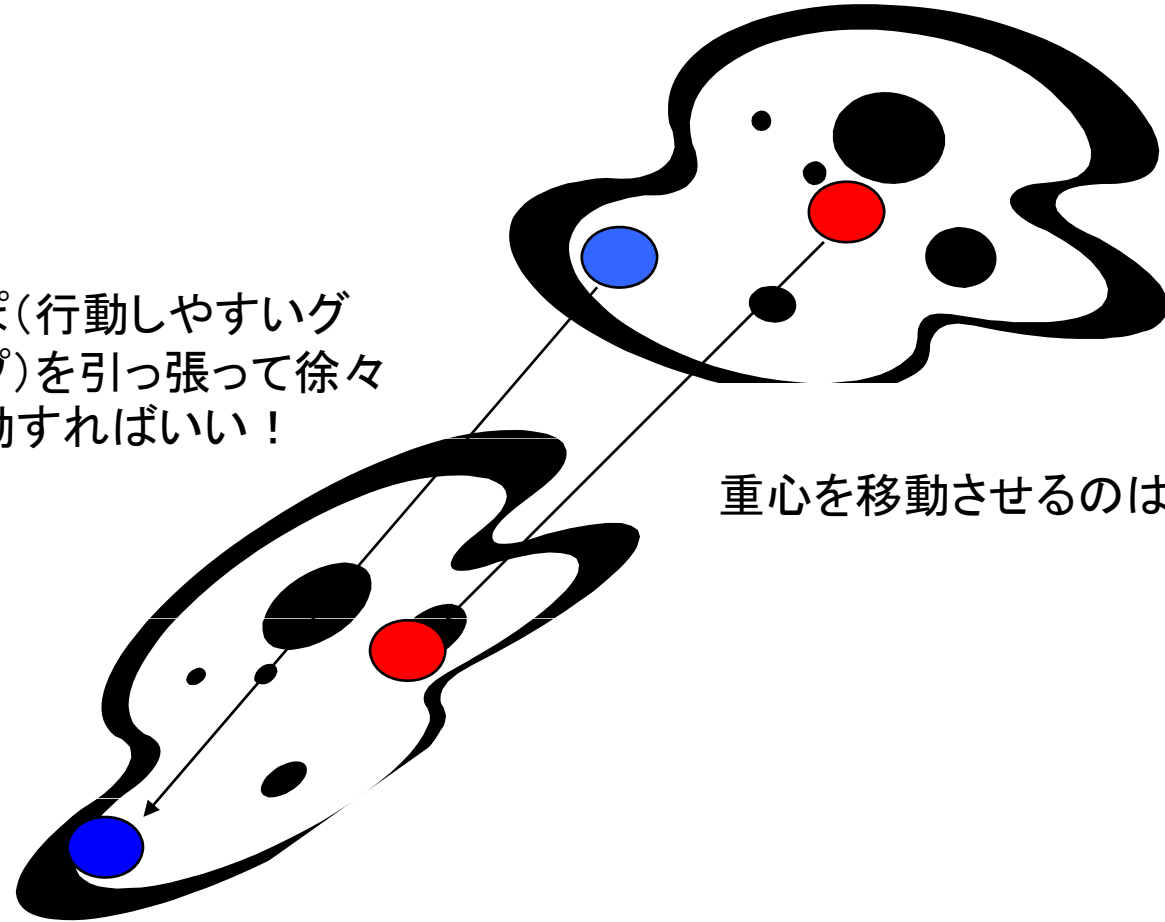
低環境負荷型消費

持続可能性重視価値観

従来型価値観

先っぽ(行動しやすいグループ)を引っ張って徐々に移動すればいい！

重心を移動させるのは大変



4. おわりに

- 低炭素社会を考えることは、我々が20年後、50年後にどんな社会に住みたいか、を考えることになります。1年ではできないことも20年後、50年後には可能になることは多くあります。「今の自分にはできない」けれど「20年、50年の間には出来る」ことを考えることも重要です。それは、個人のレベルでも、市全体のレベルでも、日本全体のレベルでもそうです。みなんで考えていこうではありませんか。